

福岡県立大学社会福祉学科学生のボランティア意識に関する調査研究

—福祉ボランティアを通じた経験型実習導入の可能性Ⅱ—

松岡 佐智・本郷 秀和

要旨 本論文では、福岡県立大学社会福祉学科学生に対して実施したボランティア活動に関するアンケート調査の結果を基に、先行研究を踏まえながらその現状と課題を考察する。さらに、学生自身が福祉ボランティアという立場で、自ら積極的に福祉施設等で実践経験を積むことができるかを明らかにすることを目的とする。

主な調査結果としては、①学生の多くがボランティア活動を行いたいと考えているのにもかかわらず、その一方で学生生活をアルバイトによる収入で支えており、ボランティア経験を積むことが厳しい現状であること、②本学社会福祉学科の学生は、ボランティア活動を将来社会福祉専門職として働くことを見据えた活動として捉えており、希望する活動内容としても「相談援助活動」を掲げていたこと、③大多数の学生が大学に対してボランティアに関する情報提供・相談体制を希望していること、などが明らかになった。

なお、今後の課題として、福祉ボランティアとしてのメリットを備えた経験型実習を社会福祉実習における導入教育として捉え、実習カリキュラムの中へ取り入れていく必要性が挙げられた。

キーワード 福祉ボランティア、実習教育、大学生

I. はじめに（研究背景）

現在、福祉系大学における「社会福祉士」・「精神保健福祉士」の受験資格取得の要件の1つとして、「社会福祉援助技術現場実習」、「精神保健福祉援助実習」が位置づけられている。これらのカリキュラム化された実習では、実習受け入れ機関・施設が提供するプログラムに基づき実施されることが多いため、学生が自発的・主体的に考えながら臨む実習とは言い難

い。実習プログラムという一定の枠の中で、決められたタイムスケジュールに従い、実習指導者の指導の下で実習を行っている。将来、社会福祉専門職として相談援助を担う社会福祉学科の学生にとっては、前述したようなカリキュラム化された実習のみならず、学生各自が自発的・主体的に福祉現場での社会経験を積み重ね、円滑な人間関係の形成や対人援助に関わる実践力を育むことができるような実習環境の導入も必要であると考えられる。なぜならば、社会福

社専門職には、多様化・複雑化する福祉ニーズに対応できる専門性が必要であり、その専門性には、専門的知識・専門的技術・専門的倫理だけでなく、柔軟性、主体性、発想力といった個人的素養という下地が必要である¹と考えるからである。

そこで、学生が柔軟性、主体性、発想力を育むことができる環境及び活動として挙げられるのが、「福祉ボランティア」である。そもそもボランティアとは、「自主性（自分の意思が尊重され、自己の決定によって行う行為）」、「無償性（金銭的行為を目的としたり、労働としての対価を求めたりしない非営利行為）」、「公共性（その成果が広く人々や社会に利益をもたらす行為）」、「創造性（新しい分野や問題に対してより積極的に取り組み、社会を開発していく行為）」を特性としている²。さらに、その活動対象を社会福祉領域としている「福祉ボランティア」は、対人支援活動が多く、命と人権を大切に守りあい、かばいあい、支えあい共に生きる人間的な営みであり、優しさの実践とも言われている³。また、福祉専門職養成課程の学生にとって、ボランティア活動は福祉現場での体験学習を可能にし、大学での理論学習に刺激が与えられ、個々の学びを深めるばかりでなく、学生自身の人間的な成長にもつながるものであるとの報告もある⁴。このようなことから「福祉ボランティア」は、学生が自発的・主体的に福祉現場での社会経験を積み重ね、円滑な人間関係の形成や対人援助に関わる実践力を育むことができる活動として捉えることができる。

この考え方を基に、我々が昨年度から検討している実習形態が「福祉ボランティアを通じた経験型実習」である。経験型実習とは「学生が

自発的に選択したボランティア活動（柔軟な構造）のなかで経験した素材をもとにして教員または仲間同士が対等な関係で対話することで、実習生がボランティア経験をふり返り、自らの行動、感情、価値観、思考形態に自分なりの意味づけをしながら、結果的には柔軟性、主体性、発想力を育み、自分らしい生き方、援助観の形成を身につけていくことに寄与する学習の場」と定義されている⁵。この「福祉ボランティアを通じた経験型実習」を「施設にとっては学生による福祉ボランティア、学生にとってはボランティア実習」と捉え、実施していくための可能性について探りたい。なお、社会福祉施設、学生、大学が相互協力体制を構築し、福祉ボランティアを通じた経験型実習を導入した場合のメリットとしては次のようなことを推測している（図-1）。

① 学生

i) 将来の進路選択の視野を広げる、ii) 社会福祉現場実習の実習先の自己開拓を促進しやすい、iii) 自然な形で人間同士の関わりを通じた実習ができる、iv) 大学の授業の裏付けや問題意識の発見等を体験から確認・発見できる、v) 就職先の開拓につながるなど。

② 社会福祉施設

i) 施設利用者の交流の場の促進、ii) 施設の開放・透明性が向上、iii) 職員の業務軽減等。

③ 大学

i) 大学の社会貢献、ii) 大学と福祉施設との交流促進、iii) 教員と現場職員のネットワークの促進等。

本研究の位置づけ(三者の相互協力体制の構築要因を探る)

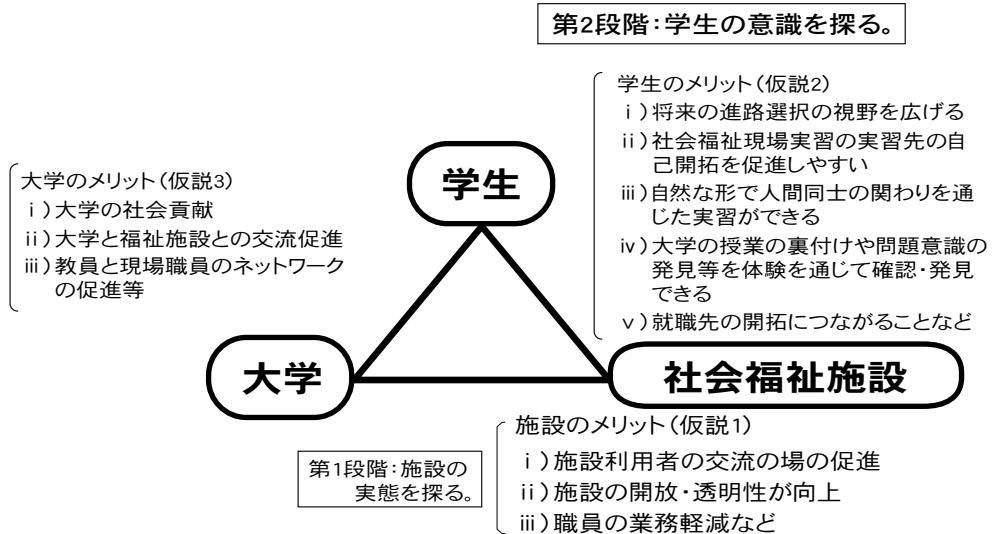


図-1 本研究の位置づけ

II. 研究目的と方法

本研究では、福岡県立大学社会福祉学科学生に対するボランティア活動に関するアンケート調査の結果と、先行研究等を踏まえ、ボランティア活動の現状と課題を明らかにする。そして、本学社会福祉学科学生に対して、福祉施設等でのボランティア経験を推奨し、積極的な情報提供などを行った場合の学生の参加、効果、見直しなどを考察する。また、本当に学生自身が福祉ボランティアという立場で、自ら積極的に福祉施設等で実践経験を積むことができるかを明らかにすることを目的とする。

これまでの研究の取り組みとしては、福祉ボランティアの受け入れ機関としての実態を探るために、2006年度に本学周辺(北九州、筑豊、京築地域)の社会福祉施設に対して、ボランティア受け入れに関する意識調査を実施した。その結果、①社会福祉施設及び利用者の多く

は、ボランティアに好印象を持っており、地域に開かれた施設であるために重要な役割を担っているということ、②ボランティアには、利用者の尊厳を守り、コミュニケーションを媒介としたサポートが期待されていること、③社会福祉施設内において、ボランティア自身が希望する活動内容が尊重されやすいことなどが明らかになっている⁶⁾。

本研究の方法としては、まず大学生のボランティアに関する一般的な動向として、①ボランティア経験と現状、②ボランティア活動の動機、③ボランティア活動の阻害要因について、いくつかの先行研究を基に整理する。次に、2007年度に我々が本学社会福祉学科学生に対して行ったボランティア活動に関する意識調査の結果について先行研究の結果との比較し、考察する。

Ⅲ. 大学生のボランティアに関する動向

大学生のボランティアに関する動向について、①平成9年に財団法人内外学生センターが行った「学生のボランティア活動に関する調査」⁷（以下、平成9年の全国調査）、②①の継続調査である平成17年に日本学生支援機構が行った「学生ボランティア活動に関する調査」の報告書概要⁸（以下、平成17年の全国調査）、③立命館大学における一般文系学部学生に行った調査報告書「立命館大学生のボランティア活動の意識・実態調査報告とボランティア活動の具体的支援」⁹（以下、R大学調査）、④本学と同様の社会福祉学部学生を含む学生に対して行った調査報告である「山口県立大学における学生のボランティア活動に関する調査報告」¹⁰（以下、Y大学調査）等を参考に整理する¹¹。

1. ボランティア経験と現状

ボランティア活動の経験と現状について、平成9年の全国調査によると、7.2%の学生が「現在ボランティア活動をしている」と回答しており、「過去にしていた」という者は33.5%であり、40.7%の学生がボランティア経験者であった。これが、平成17年度の全国調査では65%に上昇しており、全国的な動向としてボランティア経験のある学生は年々増加している傾向が推測できる。また、R大学調査では、「現在ボランティア活動をしている」14.0%、「過去にしていた」33.7%と経験者が57.7%になっており、Y大学調査では「現在ボランティア活動をしている」15.0%、「過去にしていた」58.3%と経験者が73.3%を占めていた。さらに、Y大学調査において、社会福祉学部学生のみの回答をみると、「現在ボランティア活動をしている」

18.5%、「過去にしていた」65.5%と経験者が84.0%を占め、社会福祉学部学生には、ボランティア経験者が多いことがわかる。これは平成17年の全国調査結果概要の中においても、「社会福祉学系学部、教育学部にボランティア経験者が多い」¹²と示されていることから明らかである。

ボランティア活動参加のきっかけについては、平成9年及び平成17年の全国調査では、「自分の自発的な意思で」が半数を超え最も多いのに対し、R大学調査では「知人に誘われて」が、Y大学調査では「サークル等で参加する機会があって」が最も多くなっていた。ただし、R大学調査、Y大学調査のどちらにおいても、続いて「関心があって」、「何かをしたくて」、「自分の自発的な意思で」などが多くなっていた。また、大学生のボランティア活動に対する日米比較を行った調査においても同様の結果が出ており¹³、ボランティア活動を行うためのきっかけとしては、個人の自発的な意思とあわせ、身近なサークルまたは団体そして人的ネットワークが重要であることがわかる¹⁴。

2. ボランティア活動をする動機

ボランティア活動をする動機について、平成9年の全国調査では、「困っている人の手助けをしたいから」46%、「新しく感動できる体験をしたいから」36%、「新しい人と出会いたいから」34%が上位に挙がっており、平成17年の調査結果でも同様の結果が出ている。これに対し、Y大学調査では、「新しい人と出会いたいから」が最も多く40.3%を占めており、次いで「困っている人の手助けをしたいから」37.1%、「新しく感動できる体験をしたいから」36.9%の順になっていた。特に、ボランティア活動経

験の有無別において比較した所、ボランティア非経験者においては、「困っている人の手助けをしたいから」44.9%が最も多くなっていたのに対し、ボランティア経験者では「新しい人と出会いたいから」42.5%、「新しく感動できる体験をしたいから」38.8%と、「人助け」よりも「新しい人や感動との出会い」をその理由に挙げていた¹⁵。また、他の先行研究においても全国調査と同様の3項目が上位に挙がっており¹⁶、ボランティア活動の動機として、利他的と利己的・自己啓発的の両面の動機がみられている¹⁷。

3. ボランティア活動の阻害要因

ボランティア活動の阻害要因については、平成9年の全国調査では「大学の時間が忙しい」53%、「活動に要する技術、知識がない」46%、「情報が不足している」43%、「活動資金がない」38%となっている。平成17年度の調査でも同様の項目に加え、「アルバイトが忙しい」が上位に挙がっている。これに対し、R大学の調査では、「きっかけがない」33.6%が最も多く、次いで「時間がない」19.2%、「興味がない」17.8%が続いていた。さらに、Y大学の調査では、「活動に要する技術や知識を持っていない」47.8%、「大学の時間が忙しい」38.6%、「情報が不足している」25.0%、「活動資金がない」16.4%の順になっていた。これらの結果から、ボランティア活動を阻害している要因としては、「大学の時間が忙しい」、「活動に要する技術、知識、きっかけ、情報がない」、「活動資金がない」の3点に大きく分類して考えることができる。

また、アルバイトとボランティア活動の関係では、平成17年度の全国調査では、75%の

学生が「ボランティア活動よりもアルバイトを優先させる」と回答しており、Y大学の調査でも73.7%の学生が「ボランティア活動よりもアルバイトを優先させる」と回答していることから、大学生の多くはアルバイトを優先させる傾向にあることがわかる。これは、他の先行研究においても同様の傾向が示されており¹⁸、学生たちは学費と生活費を得るため、日頃のアルバイトにかなり依存し、ボランティア活動を行う余裕がなく、アルバイトを優先せざるを得ない事情によるものと推測されている¹⁹。

IV. 福岡県立大学社会福祉学科におけるボランティア意識に関する状況

ここでは、本学社会福祉学科の学生に対して行ったボランティア意識に関する調査結果について整理する。

1. 調査概要

(1) 本調査の目的

本調査では、社会福祉学科学生における①学生の福祉ボランティア経験と現状、②福祉ボランティア活動に対する意欲・意識、③福祉ボランティア活動を阻害する要因、などを明らかにすることを目的としている。

なお、本論文で用いる調査結果は、調査研究報告書「福祉ボランティアを通じた経験型実習の可能性(2)」(平成20年3月発行、平成19年度福岡県立大学研究奨励交付金による研究)にて、本郷秀和・松岡佐智が執筆を担当した部分を整理して用いている。

(2) 調査対象

福岡県立大学人間社会学部社会福祉学科の1年生から4年生

(3) 調査方法

1年生から3年生に対しては、アンケート票を用いた集合調査を行ったが、4年生については、各ゼミの担当教員にアンケート用紙を渡して調査を依頼し、回答した学生が社会福祉学科研究室に返却するという形式をとっている。

(4) 調査期間

- ① 1年生：2007年7月9日
- ② 2年生：2007年7月24日
- ③ 3年生：2007年6月26日
- ④ 4年生：2007年7月9日～8月8日

(5) 学年別の回収数・回収率

- ① 1年生：回収数55/59（回収率93.2%）
- ② 2年生：回収数55/61（回収率90.2%）
- ③ 3年生：回収数58/61（回収率95.1%）
- ④ 4年生：回収数37/55（回収率67.3%）
- ⑤ 全体：回収数205/236（回収率86.9%）

2. 調査結果

(1) 調査対象者の概要

調査対象者の学年ごとにおける性別の分布は、1年生：男性9人（16.4%）、女性46人（83.6%）、2年生：男性9人（16.4%）、女性46人（83.6%）、3年生：男性12人（20.7%）、女性46人（79.3%）、4年生：男性7人（18.9%）、女性30人（81.1%）となっていた。居住地域としては、福岡市11名（5.4%）、北九州市20名（9.8%）、飯塚市5名（2.4%）、田川市郡143名（69.7%）、その他26名（12.7%）となっており、

多くの学生が大学周辺の田川市郡にて生活している現状が窺えた。

また、現在のアルバイトの状況については、全体的で142人（69.3%）の学生がアルバイトをしており、そのうち95人（66.0%）の学生が「生活にアルバイトが欠かせない」と回答していた。つまり、アルバイトによる収入は学生生活を支えており、生活の重要な位置づけとなっている現状があるのである。よって、学生がボランティア活動を取り組みたいと考えたとしても、収入が得られるアルバイトの方が優先されやすいことから、ボランティア活動が取り組みにくい状況に陥っていることが推測される。

さらに、福祉施設・機関におけるアルバイトの希望状況としては、165人（90.9%）の学生が希望しており、学生の多くはアルバイトで生計を立てている現状を踏まえると、福祉施設でのアルバイトのニーズは非常に高いといえる。反面、福祉施設・機関などでのアルバイト経験はほとんどの学生において経験が全くない状況であった[186人（91.6%）]。これらの結果から、多くの学生は福祉施設・機関などでのアルバイトを希望しているにも関わらず、実際は達成できていないという厳しい状況がうかがえる。この要因としては、アルバイトが少ない、情報入手先、手段・方法が分からない等が推測できる。

(2) 福祉ボランティアの経験の実態

これまでの福祉ボランティアの経験については、全体的にみると過半数の学生にボランティア経験があった[110人（53.7%）]。学年別においては、1、2年生では、「経験がある」は「経験は無い」よりも少なく[1年生：「経験がある」19人（34.5%）、「経験がない」36人（65.5%）、2年生：「経験がある」21人（38.2%）、「経験

がない] 34人 (61.8%)、しかし、3、4年生になるとこれが逆転し、両学年とも70%以上の学生がボランティアの経験をもっていた〔3年生：「経験がある」43人 (74.1%)、「経験がない」15人 (25.9%)、4年生：「経験がある」27人 (73.0%)、「経験がない」10人 (27.0%)〕。クロス表の残差分析の結果においても、3、4年生におけるボランティアの「経験がある」は、有意に高くなっていた (両者とも1%水準)。これらの結果から、本学社会福祉学科学生の傾向としては、学年が上昇していくとともにボランティア経験を積み重ねていた。

これまでの福祉ボランティア活動のトータル期間については、「1ヶ月未満」65人 (59.6%)、「6ヶ月以上」23人 (21.1%)、「1ヶ月～3ヶ月未満」15人 (13.8%) の順になっており、1ヶ月未満の短期的な関わりでの活動と6ヶ月以上の長期的な関わりでの活動、に2分されやすい現状が明らかになった。学年ごとにみた傾向としては、3年生および4年生では、「6ヶ月以上」の割合が1年生および2年生よりも大きく増加していることから〔1年生：2人 (10.5%)、2年生：0人 (0%)、3年生：12人 (27.9%)、4年生：9人 (33.3%)〕、学年が上がるにつれてボランティア活動の経験を増やしていることが理解できる。

福祉ボランティアの活動先としては、「高齢者関係」91人 (44%)、「障害児・者関係」41人 (19.6%) が多く占めていたのに対し、就職先としての希望が比較的高い「医療機関」は3人 (1.4%) と非常に少なく、ボランティア活動が取り組みにくい組織であるとも考えられた。さらに福祉ボランティア活動の内容としては、「イベント・行事」23人 (27.7%)、「話し相手」22人 (26.6%)、「レクリエーション」17

人 (20.5%) となっていた。

以上のことから、福祉ボランティアの経験の実態としては、学年が上がるにつれて活動経験を積み、高齢者及び障害者関係等の施設において、イベントや行事の手伝いや話し相手等のコミュニケーション活動を行っていることが明らかになった。

(3) 福祉ボランティア活動の現状

調査をした時点において、福祉ボランティア活動を行っている学生は、59人 (28.9%) であり、活動していない学生の方が145人 (71.1%) と大多数であった。しかし、3年生においては、現在「活動をしている」と回答した学生が26人 (45.6%) を占め、他の学年と比較しても有意に多く占めていた ($X^2(3)=10.983$ $P<0.05$)。

現在ボランティア活動を行っている活動分野については、「児童関係」22人 (40.7%)、「高齢者関係」17人 (31.5%) が多く占めており、その内容としては「イベント・行事への参加」24人 (43.6%)、「話し相手」19人 (34.5%) 等が挙げられていた。

また、福祉ボランティア活動の頻度としては、全体では「不定期」26人 (44.1%) と回答した学生が最も多くなっていたが、「1週間に1回以上」11人 (18.6%) と「1ヶ月に1回以上」19人 (32.2%) をあわせると、ボランティア活動をしている学生の約半数は、少なくともひと月に1回は定期的な活動をしていることが明らかになった。特に、4年生は回答者数が少ないものの ($N=9$)、その内の5名 (55.6%) が1週間に1回以上ボランティア活動をしており、他の学年より突出して頻度が高くなっていた〔1年生：1名 (10%)、2年生：0人 (0%)、3年生：5人 (18.5%)〕。その理由としては、

4年次は授業が少なく、ボランティア活動に費やす時間的余裕が他学年よりあること、ボランティア活動を就職活動の一環と捉えていること等が考えられる。

社会福祉学科の学生がボランティアに取り組もうとする場合の活動しやすい曜日と時間帯の関係については(MA)、「土曜日」、「日曜日」が共に多く(土曜日127人、日曜日58人)、時間帯は、「土曜日」午前62人(48.8%)、午後68人(53.5%)、「日曜日」午前34人(58.6%)、午後28人(48.3%)となっていた。この結果から、ボランティア活動に参加しやすいのは、大学が休みである「休日」であり、「土曜日の午後」が最もボランティア活動に取り組みやすい曜日と時間帯になっていると考えられた。

福祉ボランティア活動を行う際の交通手段とボランティア先までの移動時間(許容範囲)の関係では、全体的には30分以内が多く[116人(56.6%)],交通手段として多く占めていた「バス・JR」では、「30分以内」79人(55.2%)、「1時間以内」23人(33.6%)となっており、交通手段が「自転車」の場合も、「30分以内」が最も多くなっていた[81人(57.4%)]。つまり、学生の多くはボランティア活動をする場合、公共の交通機関及び自転車を主要な移動手段として考えており、その時間としては30分以内が理想的であると考えていることが推察される。

以上のことをまとめると、本学学生のボランティア活動を行う場合、「土曜の午後」が参加しやすく、「公共の交通機関」または「自転車」を交通手段としているため、30分以内で行くことができる大学の近隣地域の施設を福祉ボランティア活動先として希望しやすいと推測される。

(4) 福祉ボランティア活動に対する意欲・意識

福祉ボランティア活動に対する意欲については、福祉ボランティア活動を「したい」113人(55.1%)、「非常にしたい」63人(30.7%)と回答しており、全体で8割以上の学生がボランティア活動を希望していた。

次に、ボランティア活動に参加する場合の動機・きっかけとしては、「自分の知識・技術向上のため」という回答が最も多く(149人:72.7%)、「就職のため」26人(12.7%)、「友人・先輩からの勧め」20人(9.8%)に比べ高く、学生は、ボランティア活動は自分自身の成長のために行なうと考えていると推測できる。併せて、ボランティア活動に期待することとしては、「将来の進路を決める材料になる」が最も多く[92人(45.1%)],ボランティア活動を通して自分が将来進みたい分野、適性を見極めたいと考えているのであろう。

学生がボランティア活動を試みたいと思っている分野は、全体としては「児童関係」が最も多く[56人(27.3%)],以下「高齢者関係」50人(24.4%)、「病院」48人(23.4%)の順となっていた。さらに、活動の内容については、全体で「イベント・行事」57人(27.8%)、「相談援助」48人(23.4%)、「話し相手」42人(20.5%)という結果になっていた。しかし、学年ごとにみると、1年生は「話し相手」を希望する学生が最も多く[17人(30.9%)],2年生は「イベント・行事」[23人(41.8%)],3年生と4年生は「相談援助」〔3年生:21人(36.2%)、4年生:13人(35.1%)〕と学年ごとに違いをみることができた。この結果からは、3・4年生は実習や進路を意識して、社会福祉士の中心的な業務である相談援助をボランティアの活動内容として

望んでいると推測できる。

ボランティア活動をする人に求められる態度(姿勢)として、学生が最も大事だと思っているのは「積極性」[126人(61.5%)]、「明るさ」[48人(23.4%)]であると回答している学生が多いことから、ボランティア活動者には、元気で活発な態度が好ましいと考えていることがわかる。さらに、ボランティア活動の際、学生が身につけておくべきものとして重要視しているものとしては、「コミュニケーションのとり方の知識」[122人(59.8%)]であった。また、3、4年生は「福祉の倫理・価値」を挙げている者が1、2年生よりも高くなっており〔1年生：3人(5.5%)、2年生：9人(16.7%)、3年生：18人(31.0%)、4年生：11人(29.7%)〕、本学科での学びの成果として受け止めることができよう。

このように、福祉ボランティア活動に対する意欲・意識について、学生たちは非常に高いボランティア参加意欲を持っており、ボランティア活動は「自分の知識・技術の向上のため」と考え、「将来の進路を決める材料になる」ことを期待して参加している学生が多いことが明らかになった。

(5) 福祉ボランティア活動の阻害要因

福祉ボランティア活動できない要因として、全体では、「アルバイトが忙しい」63人(30.9%)、「大学の講義が忙しい」33人(16.2%)、「ボランティアの情報がない」25人(12.3%)などとなっており、学年別にみると1年生では「大学の講義が忙しい」が多く、2、3、4年生においては「アルバイトが忙しい」が多く占められていた。全体的にみると、授業のない時間はアルバイトをしている学生が多く、ボラン

ティア活動をする時間を確保できない学生が多いことが明らかになった。これは、1の調査対象者の概要で述べたように、アルバイトの収入により生活を支えている学生が多いことがその理由として考えられる。また、ボランティアの情報提供については、現在は掲示による情報提供を中心としているため、今後ボランティア活動を促進していくためには、情報提供のあり方を改善する必要があると言えるだろう。

ボランティアのための交通費負担については、全体では、「500円以内」が最も多く[87人(42.4%)]、「1000円以内」57人(27.8%)、「300円以内」20人(11.7%)の順になっていた。ボランティアのための交通費負担は、学生のボランティア継続の阻害要因にならないようにするためには、往復で500円から1000円以内で収まることが妥当であると推測される。

ボランティアに対する謝礼については、全体で107人(52.2%)の学生が「交通費を負担してほしい」と回答しており、学生たちは最低限の謝礼として交通費程度を望んでいることが明らかになった。

また、大学のボランティア相談体制に関しては、ほとんどの学生が「ボランティア情報提供・相談体制が大学にあればいいと思う」と考えており[195人(95.6%)]、学生たちが大学にボランティアの情報提供・相談体制の整備を必要としていた。さらに、大学のボランティア指導についても、「大学に福祉施設等でのボランティアに関わる簡単な教育・指導体制があればいいと思う」172人(84.7%)と回答しており、ボランティア情報提供・相談体制と併せて、ボランティア教育・指導体制の整備は今後の本学の課題として挙げられる。

(6) まとめ

本学社会福祉学科における調査結果から明らかになったことについて、①ボランティア経験と現状、②ボランティア活動の動機、③ボランティア活動の阻害要因に分類し、先行研究との比較を踏まえ考察をしたい。

① 学生の福祉ボランティア経験と現状について

学生の福祉ボランティア経験と現状については、過半数以上の学生が今までに福祉ボランティアの経験があり、現在ボランティア活動を行っている学生は3割弱であった。この結果は、ボランティア経験者については全国的な一般大学生と同様の傾向を示したが、現在の活動状況は、本学学生の方が高い割合を示していた。つまり、意欲が高いといえる。

これまで経験してきたボランティア活動の内容は、対象者を高齢者や障害者した「イベント・行事への参加」や「話し相手」などが中心であったのに対し、現在の活動先としては、児童関係が多くなっていた。ボランティア活動の内容はこれまでの経験と同様に、「イベントや行事への参加」、「話し相手」などが多く、前述した結果を併せて考えると、ボランティアに求められるものとしては、活動先に関わらず、専門的な知識や技術というよりもむしろ、一般的なコミュニケーション能力や人員補助的な役割であることが推測される。

② 福祉ボランティア活動に対する意欲・意識について

本学学生の8割以上が現在ボランティア活動への参加を希望しており、その活動先としては「高齢者関係」や「病院」を挙げていた。ま

た、希望する活動内容として、3、4年生になると「相談援助」を希望する学生が多い現状が明らかになった。これらの結果から、学生はボランティア活動を単なる経験としては捉えておらず、将来ソーシャルワーカーとしての中心業務になるであろう「相談援助活動」を福祉ボランティア活動の内容として望んでいる。そのことは、ボランティア活動を行なう動機を「自分の知識・技術の向上のため」と考え、「将来の進路を決める材料になる」ことを期待して参加している学生が多いという結果にもつながっていた。なお、全国調査等では、ボランティア活動を行なう動機を「困っている人の手助けをしたいから」、「新しく感動できる体験をしたいから」、「新しい人と出会いたいから」といった利他的と利己的・自己啓発的の両面の動機がみられていた。

以上のことから、本学学生はボランティア活動を将来社会福祉専門職として働くことを見据えた活動として捉えている傾向が高いことがわかる。

③ 福祉ボランティア活動を阻害する要因について

福祉ボランティア活動を阻害する主な要因としては、アルバイトや大学の講義が忙しいという現状が明らかになった。加えて、学生たちは、授業のない時間はアルバイトをしている者が多いため、ボランティア活動を行なう時間を確保できていない実態があった。この結果は、全国的な傾向と大差なく、学生たちは学費と生活費を得るためアルバイトを行い、ボランティア活動よりもアルバイトを優先せざるを得ない事情は全国共通の課題であることが明らかになった。特に、本学では生活をしていく上でアルバ

イトの収入は欠かせないという学生たちが多く占めている以上、福祉ボランティア活動とアルバイトを両立させるための支援が必要であるとも考えられる。

さらに、多くの学生がボランティアの情報提供・相談体制の整備を望んでいたことから、福祉ボランティアの関する積極的な情報提供やコーディネート必要性が考えられた。学生は、将来社会福祉従事者として働くことを意識してボランティア活動を行なっているため、学生の希望するボランティア活動内容を可能にする支援が必要である。大学の福祉ボランティア活動に対する相談支援体制の確立は、今後の重要な課題の1つとして挙げることができる。

V. おわりに

今回の調査結果から、学生自身が福祉ボランティアという立場で自ら積極的に福祉施設等で実践経験を積むことは難しく、経験型実習といった一定の実習カリキュラムの中における福祉ボランティア活動を推進していく必要性が推察された。その理由としては、①本学社会福祉学科学生の多くがボランティア活動を行いたいと考えているにもかかわらず、その一方で学生生活をアルバイトによる収入で支えており、授業時間以外ではボランティア経験を積むことが厳しい現状があること、②本学学生は、ボランティア活動を一般的な利他的・利己的及び自己啓発的活動としてではなく、将来社会福祉専門職として働くことを見据えた活動として捉えており、希望する活動内容としても「相談援助活動」を掲げていたこと、③大多数の学生が大学に対してボランティアに関する情報提供・相談体制及び教育・指導体制を希望していること

などが挙げられる。

以上のことから、福祉ボランティアとしてのメリットを備えた経験型実習を社会福祉実習における導入教育として捉え、実習カリキュラムの中へ取り入れていくことが本学の検討すべき課題として挙げられる。また、その際、学生の相談・教育体制を大学内においてどのように確立するか（実習担当教員がその役割を担うのか、もしくは新たにボランティアセンター等を設置する必要があるのか）についても検討していかなければならないだろう。

さらに今後の方向性としては、これまで行ってきた(1)本学周辺の社会福祉施設のボランティア受け入れの実態把握（平成18年度調査）、(2)本学社会福祉学科学生の社会活動・ボランティア活動へのニーズ、活動実態、ボランティア活動を阻害する要因などの整理（平成19年度調査）を踏まえ、(1)と(2)を比較検討し、学生のニーズと社会福祉施設のニーズの共通点・相違点等を把握したいと考えている。

注

- 1 西原尚之「I. 経験型実習の考え方」、『福祉ボランティアを通じた『経験型実習』導入の可能性（2）－福岡県立大学・社会福祉学科学生のボランティア意識の現状と課題－（福岡県立大学研究奨励交付金報告書）』『福岡県立大学付属研究所 生涯福祉研究センター研究報告叢書』Vol.37、2008年、p5
- 2 米山岳廣『ボランティア活動の基礎と実態』文化書房博文社、2006年、p7～8
- 3 前掲書2、p89
- 4 藤田久美「福祉専門職養成におけるボランティア教育の位置づけと課題」『山口県立大学社会福祉学部紀要』第11号、山口県立大学、2005年、p56
- 5 本郷秀和・松岡佐智・西原尚之「福祉ボランティ

- アを通じた経験型実習導入の可能性 I』『福岡県立大学人間社会学部 紀要』第16巻第1号、福岡県立大学、2007年、p16
- 6 前掲書5、p15
- 7 この調査は、旧財団法人内外学生センター（2004年4月に日本育英会等と合併し現在は日本学生支援機構に名称が変わっている）が、平成9年12月に全国98大学在學生（国立22大学、公立4大学、私立72大学）を対象に行った「学生のボランティア活動に関する調査」のことを指している。サンプル数は10000サンプルであり、有効回収数は7225サンプル、有効回収率は72.3%であった。
- 8 この調査は、前掲7の調査の経年調査として、平成17年に日本学生支援機構が実施した「学生ボランティア活動に関する調査報告書」のことを指している。調査対象は全国211大学の2、3年在學生（国立43大学、公立9大学、私立159大学）であり、サンプル数は5000サンプル、有効回収数4036サンプル、有効回収率80.7%であった。なお、本研究では、この調査結果概要のみを使用している。
- 9 この調査は、立命館大学が行った「ボランティア活動に関する意識・実態調査」のことを指している。調査対象は、政策学部、国際関係学部、文学部、法学部、産業社会学部の1～4年生までの学生であり、回答者数は397サンプル、分析対象者数は392サンプルとなっている。なお、有効回収率等は示されていない。
- 10 この調査は、山口県立大学が2001年に全学生に対して行った「ボランティア活動に関する調査」のことを指している。調査対象者は、国際文化学部、社会福祉学部、生活科学学部、看護学部の1～4年生1257名であり、有効回答数は804サンプル、有効回収率は64.0%であった。
- 11 ③、④の調査結果を用いた理由としては、共にそれぞれの大学で行った調査結果と①の調査結果を比較しまとめているため、一致している調査項目が多かったことがある。
- 12 独立行政法人日本学生支援機構「学生ボランティア活動に関する調査報告書調査結果概要」2006年、p3
- 13 佐々木正道「第6章 大学生のボランティア活動と受け入れ施設・団体の対応に関する意識と実態」『大学生とボランティアに関する実証的研究』ミネルヴァ書房、2003年、p228表6-2参照
- 14 前掲書13、p228
- 15 森法房「山口県立大学におけるボランティア活動に関する調査報告」『山口県立大学社会福祉学部紀要』第8号、山口県立大学、2002年、p45～46
- 16 前掲書15、p226、表6-1参照
- 17 前掲書15、p227
- 18 前掲書15、p241 表6-7参照
- 19 前掲書15、p241

参考文献

- ・佐々木正道『大学生とボランティアに関する実証的研究』ミネルヴァ書房、2003年
- ・谷田勇人「福祉ボランティア活動をする大学生の動機分析」『社会福祉学』第41巻第2号、日本社会福祉学会、2001年、p83～94
- ・藤田久美、渡邊治子「実習レディネス形成に着目した福祉実習教育のあり方に関する研究 一期間実習後の学生の調査を基にして一」『山口県立大学社会福祉学部紀要』第10号、山口県立大学、2004年、p19～27
- ・橋本勇人、別惣淳二、豊山大和「介護福祉士養成と福祉ボランティアの関係 一介護福祉士養成制度発足依頼の卒業生を対象とした調査を通して一」『川崎医療福祉学会誌』Vol.8、No.2、川崎医療福祉大学、1998年、p257～269
- ・荒川裕美子、保住芳美、吉田浩子「小・中・高等学校

におけるボランティア体験と会い学生のボランティア観の関連」『川崎医療福祉学会誌』Vol.16、No.1、川崎医療福祉大学、2006年、p133～139